

p.1 第 35 回 JASPM 年次大会の開催と発表募集について

p.2 2023 年度第 1 回特別例会報告加藤賢

p.5 2023 年度第 1 回オンライン例会 卒論・修論発表会報告福永健一・永井純一・忠聡太

Information

P9 事務局より

第 35 回 JASPM 年次大会の開催と 発表募集について

【ご挨拶】

大会実行委員長 福永健一

2023 年の JASPM 大会は、12 月 9 日（土）と 10 日（日）に、四国学院大学にて開催されます。

第 35 回を迎える本大会は、3 大会ぶりに全て対面で開催されます。第一日（12 月 9 日）午後個人発表～総会～懇親会、第二日（12 月 10 日）午前ワークショップ、午後にシンポジウムの順でプログラムを組みました。個人発表をする若手会員が懇親会にて参加者と交流を深められるよう意図したものです。個人発表とワークショップの申込にあたっては、日程にご留意ください。

香川県善通寺市に立地する四国学院大学は、1949 年にプロテスタント・福音主義信仰に立つリベラルアーツ・カレッジとして米国南長老教会によって創立、1962 年に大学が設立されました。大学までのアクセスは、関西方面からは高速バス（JR 四国バス停留所「善通寺本郷通り」から徒歩 5 分）または鉄道（JR 善通寺駅から徒歩 5 分）が、他地域からは鉄道または飛行機（高松空港から車で 50 分）が便利です。

12 月に四国学院大学で皆さまとお会いできるのを楽しみにしております。

【発表募集】

研究活動理事 南田勝也・永井純一

本年度の大会での個人発表（12 月 9 日（土）午後）、ワークショップ（12 月 10 日（日）午前）の募集をいたします。発表申込書（個人発表用とワークショップ用のそれぞれのワードファイルがあります）をダウンロードし、必要事項を記載して、下記メールアドレスまで添付ファイルにて送信してください。受付締切（8 月 31 日（木））後に研究活動委員会が申込内容を吟味したうえで、発表についてのお知らせを個別に連絡いたします。

■申込書類

学会ウェブサイト (<https://www.jaspm.jp/>) からダウンロードすることができます。

- ・個人発表用申込書 Jaspm35in[.docx
- ・ワークショップ用申込書 Jaspm35ws[.docx

上記のリンクから申込書をダウンロードし、必要事項を記載してください。

■発表時間（予定）について

- ・個人発表：30分（発表20分＋質疑応答10分）
- ・ワークショップ：3時間

■ワークショップ企画案について

ワークショップでは、一つのテーマをめぐって多角的に提起される問題について、フロアとパネルの間で時間をかけて議論することができます。ご自分の研究フィールドの意義を知らしめる絶好の機会ですので、奮ってお申してください。

パネルは通常、3名ほどの発表者（問題提起者）と1名の討論者から構成されます。申込時に全員の名前を記載することを原則とします。申込時に討論者についてやむを得ず未定であるという場合は、申込採択となれば、人選について研究活動委員会より相談させていただきます。なお非会員も問題提起者や討論者になることができますが、謝礼や交通費は支払われません。

■申込締切

個人発表・ワークショップとも 2023年8月31日 (木) (厳守)

※個人発表・ワークショップともに申込書のファイル名のカッコ内に氏名を記入して提出ください。

例：Jaspm35in[江戸椎欄].docx

Jaspm35ws[美里居あいり].docx

※研究活動委員会より受領の連絡をいたします。

※現在非会員の方は、入会申込をされたのちに発表申込をしてください。入会申込はリンクを参照してください。 http://www.jaspm.jp/?page_id=90

■大会での個人発表、ワークショップのニュースレターへの報告に関して

大会での個人発表、ワークショップは、翌年3月発行予定のニュースレターに報告を書いていただく必要があります。発表の申込をなさる方はご承知おきください。

- ・締切：2024年2月9日(金)
- ・分量：個人発表報告 1200字程度
ワークショップ報告 3200字程度
- ・原稿の提出先：学会ニュースレター担当（研活）
(jaspmkk@gmail.com)

・報告内容：

- ① 個人発表は、発表者自身が、発表の内容と質疑についてまとめてください。
- ② ワークショップは、問題提起者や討論者以外で報告者を決めて、内容と質疑についてまとめるよう代表者が報告者に依頼してください。発表当日（12月10日（日））までに報告者を決め、お名前と連絡先を、学会研究活動担当 (jaspmkk@gmail.com) までお知らせ下さい。

■個人発表・ワークショップ申込書送付先・問い合わせ先

研究活動委員会 南田勝也・永井純一

メールアドレス jaspmkk@gmail.com

2023年度第1回特別例会報告

加藤賢

キース・ニーガス×安田昌弘トークセッション

いま読み直す『ポピュラー音楽理論入門』

日時：2023年2月22日(水) 15:00-16:30

場所：京都精華大学明窓館4F ラーニングコモンズ
ZOOMによるオンライン（ハイブリッド開催）

本例会は、ロンドン大学ゴールドスミス校のキース・ニーガス教授の来日に合わせて、安田昌弘会員の翻訳によって2004年に水声社より刊行された『ポピュラー音楽理論入門』（原題：Popular Music in Theory）の内容を、現代の視点から読み直すべく企画された対談である。実施形式はオンラインとオフラインを組み合わせたハイブリッドであり、対談開始前にはニーガス氏とも深い交流のあった三井徹会員の訃報に際して、増田聡会長が弔辞を読み上げる時間も設けられた。対談それ自体は英語で行われたが、安田会員が事前にニーガス氏の講演内容の粗訳を制作しており、また適宜同時通訳を行ったため、英語に不慣れな会員にとってもフレンドリーな場となった。安田会員が行ったさまざまな配慮に対して、深い謝意を表したい。

まず初めに、本例会の中心的なテーマである『ポピュラー音楽理論入門』が日本のポピュラー音楽研究者に与えた影響について、簡潔に振り返っておきたい。本書はもともと、ニーガス氏がイングランド・レスター大学で

教えていた1994年から1995年頃の講義ノートをもとに書かれたものである。ゆえに本書において「最新の」議論として紹介されている研究成果ですら約30年前に発表されたものであり(著者自らが日本語版の対談および本例会の対談で振り返っている通り)、インターネットに関する議論が大きく抜け落ちていることなど、時代的な制約が随所に見受けられる。

にもかかわらず、本書は依然として日本のポピュラー音楽研究者に影響を与えており、新たなテーマを扱う際の信頼できる参照元として、あるいは初学者が読むべき学術的ポピュラー音楽研究の入門書として、いまなお読み継がれている。個人的な話で恐縮だが、多くのJASPM会員の協力のもとで本年3月に刊行された『クリティカル・ワード ポピュラー音楽』(フィルムアート社)の執筆を担当するにあたり、私が真っ先に行ったこともまた、『ポピュラー音楽理論入門』の「地理」の章を再読することだった。

なぜ本書がそのような立ち位置を守り続けているのか? それは緻密な論理構成と、圧倒的な量のリファレンスにある。本書は「聴衆/オーディエンス」「産業/インダストリー」「媒介/メディアエーション」「一体性/アイデンティティ」「歴史/ヒストリー」「地理/ジオグラフィ」「政治/ポリティクス」という7つのチャプターに分かれた構成となっているが(日本語版では「対談/ダイアログ」が追加収録されている)、ニーガス氏はいずれのチャプターでも、通俗的な一般論や生活的直感のような話題から議論をスタートさせ、いくつかの主要な先行研究を参照・批判しながら問題点を整理し、やがて自身の考察を述べるというアプローチを取る。そこで参照されている先行研究をとりあえずメモしておくだけでも、これから論文を書きたい学生にとっては大助かりなのだが、私が本書を読み返すたびに感嘆してしまうのは、ニーガス氏がポピュラー音楽という「複雑系」を解き明かそうとする、その筆致の厳密さにある。本書で扱われるトピックは、たとえばこのようなものだ。大手多国籍資本はミュージシャンの敵で、インディーズは味方なのか。ロックは「男性的」な音楽なのか。「黒人音楽」とは誰のものか、何が本物(オーセンティック)か。大衆とはメディアに操作されるロボットか、それともしたたかな抵抗者なのか。グローバリゼーションは世界の音楽風景を均一化するのか、否か。音楽はどこまで政治的の力を持ちうるか、政治権力から独立しうるか。現代でもしばし

ば議論が繰り返されるトピックに対し、本書は安直なイデオロギー的・党派的断定へ流れることを避け、二項対立を止揚し、人々の営みを慎重なまなざしで見つめながら、問題の核心を明らかにしていく。

本書の中心をなすキーワードに「媒介(メディアエーション)」がある。これは音楽というものが、ある独立したものとして存在するのではなく、常に人間社会のからみ合いの中にしか有り得ない、という本書の基本的な性格を表している。「音楽とは、ある特定の社会関係、政治的プロセス、文化活動とは切り離せない、一連の概念的な前提や分析活動に依拠するかたちで生み出され、出回り、認識され、呼応されるものなのである」(本書日本語版:27頁)とあるように、それが生まれ、流通し、聴かれ、語られた背景を抜きにして音楽を語るなどできない。同一の楽曲が、異なるシチュエーションでは全く違った意味を持つことはしばしばある。音楽はさまざまな存在によって媒介されて人々の耳に伝達され、その過程で社会と複雑に混じり合っていく。あるいは逆に、音楽がさまざまな社会関係を媒介することもある。それらを研究して明らかになる「成果」とは「この場合には、こういうことは言える」という、常に留意付きのものだ。それらを実験用のアクリル水槽に押し込め、抽象的な理論モデルの構築を目指すのではなく、膨大な知識と学術的な誠実さをもって、人間社会の複雑性へと正面から向き合っているところにこそ、本書の凄みがある。それは、キース・ニーガスという研究者のスタンスそれ自体でもあるのだろう。

本例会は、そんな『ポピュラー音楽理論入門』の内容を安田会員と振り返り、「この本は一体何だったのか」、「今であればどのように書くか」について語り合う内容となった。ニーガス氏は本書の限界として、2つの要素を挙げた。まず1つは「観客、産業、媒介、歴史など、テーマごとに章が分かれていること」である。ニーガス氏は、いまこの本を書くとしたら「媒介(メディアエーション)」と「一体性(アイデンティティ)」の2つを中心的な概念とし、それらを軸としながら聴衆、産業、歴史、地理、政治といった事柄の相互関係を総体的に論じるとともに、歌や音楽についての解釈、分析、執筆についても言及するであろうと述べた。音楽-産業、音楽-政治といった項目を一对一で対応させるのではなく、それらの相互関係の中から音楽の実践を解き明かそうとする姿勢が窺える。

第2の要素として、ニーガス氏はタイトルに「理論(in Theory)」という言葉を用いたことを挙げた。本書はもともと違う書名を構想していたが、それが出版社側に拒否されてしまったため、やけっぱちで付けられたのが **Popular Music in Theory** というタイトルであったという。“in theory”とは、「修理したから、もうちゃんと動くはずだ……理屈の上では」のような、ある種の不確実性を示すために用いられる表現であり、ニーガス氏自身もある種の皮肉をそこに込めたのだという。刊行後、本書には「文化理論に関するありふれた概念以上のものは含まれておらず、抽象的な高次の理論へと昇華されていない」との批判が寄せられた一方、ニーガス氏の経験的・実証的アプローチを評価する意見もあったとのことである。

しかし、ニーガス氏がかもっとも悔いているのは、音楽に関わる人々が日常的に使っている「理論」—生成的で、経験的で、口語的なもの—を明らかにするために編まれた本書が、抽象的かつ普遍的に応用可能なポピュラー音楽の「理論」として読まれてしまったことであるという。これは、ニーガス氏が本例会において、自著 **Music Genres and Corporate Cultures** より引用した言葉が本質を突いている。「私たちが研究している社会生活は、人々が世界についてすでに自分自身の考えや概念、理論を持っているところです。(中略)私たちは、既存のさまざまな概念によってすでに理解され、解釈され、理論化され、概念化されている世界について、理解し、解釈し、理論化し、概念を発展させようとする。たとえこれらの概念が基本的なものであったり、日常的な常識であったりしても、それらを突き詰めていって、その先に何か根本的な真理を見出すことはできない」のだ。あるケーススタディを詳細に分析し、社会科学や人文科学の用語によってそれらを説明できたとしても、その成果が普遍的な事例に当てはまる理論(≒定理、法則)を証明するわけではないのである。

ニーガス氏は、もう一度本書を作り直すのであれば、タイトルを『ポピュラー音楽の可能性(possibilities)』に変更するだろうと語った。これは、後期ウィトゲンシュタインが、主著である『哲学探究 **Philosophische Untersuchungen**』において、理論や説明を避けて『「つながりを見る」ことからなる理解』を求めたことにヒントを得たものである。ニーガス氏は、このような方法論を執ることで「音楽、音楽家、そして歌や音楽家が移動す

る世界を研究することによって得られる可能性、見出すことのできるつながりを理解しようとする、可能性としての理論」の探究を目指そうとする。音楽を媒介し、音楽によって媒介される世界を研究することで見えてくるのは、ある一点に収束する真理ではなく、ある一点から無数に拡散する可能性なのである。

あわせて、ニーガス氏の近年の研究についての紹介も行われた。ニーガス氏の直近の研究成果は、中国におけるアイドルのデータ・ファンダムの研究、シンガー・ソングライターとソーシャルメディアの関わりに対する調査、ワム!を事例とした大都市郊外における地域ネットワークについての分析、デジタル・メディアの発展や多国籍企業と国民国家とのせめぎ合いの中で、いかなる力学がポピュラー音楽文化を取り巻いているかに関する論考、ユーラシア大陸の歴史的取引ネットワークを踏まえたプラネタリーな音楽史の模索に至るまで多岐に渡っており、その旺盛な研究意欲を垣間見ることができた。

フロアからは事前募集された質問に基づき、『ポピュラー音楽理論入門』の各章に対する質疑応答が行われた。紙幅の都合上、それらをすべて報告するのは避けるが、本書の中で提示されたフレームワークが、現在社会においても有効であるか、変化しているとすればそれは何かを問うものが多く、ニーガス氏もまた、それに対してアップデートされた見解を述べた。

最後に、私見を表して本報告を終わりにしたい。『ポピュラー音楽理論入門』は、アカデミックなポピュラー音楽研究における、入門書の古典であり金字塔である。この内容がひとりの人間によって書かれたというのは離れ業以外のなものでもない。しかし真に参照すべきは、本書の内容ではなく、本書の「筆法」を通して窺い知ることのできる、文化研究者としての姿勢であろう。借り物の言葉を当てはめて、人々の営みのすべてを理解したつもりになっていないだろうか。事象を丹念に観察することなく、既存のロジックを小器用に組み替えて文章生成することを研究と称してはいないだろうか。ポピュラー音楽研究は、多種多様な分野の研究者が集った学際的な研究トピックである。時に寄せ集めと批判されることもあるが、本例会の趣旨に照らせばそれ自体は決して短所ではなく、「可能性」とは言えよう。ただし、人々のつながりの中に音楽があるということを軽視し、その観察を怠るのであれば、いかにそれが緻密に書かれたものであったとしても、空理空論との誹りは免れ

得ないはずだ。本書を出発点に、本書が描き得なかった可能性の広がりや究明していくこと。それは我々後進の研究者に課せられた、重要な使命であろう。

(加藤賢)

**2023 年度第 1 回オンライン例会
卒論・修論発表会報告
福永健一・永井純一・忠聡太**

卒業論文・修論発表会

日時：2023 年 3 月 18 日(土) 10:30~16:40

会場：ZOOM によるオンライン

発表者：

宮津聰大 (九州大学芸術工学部音響設計学科)
井樋菜月 (九州大学芸術工学部音響設計学科)
熊倉光佑 (大阪市立大学大学院文化構想学専攻)
堀海斗 (宮崎公立大学人文学部)
村尾尚哉 (京都精華大学ポピュラーカルチャー学部)
牧大登 (東京大学大学院 学際情報学府)
堂前陸 (大阪市立大学文学部)
小山茉衣 (大阪市立大学 文学部)
佐藤智徳 (放送大学大学院文化科学研究科)

セッション A 司会：福永健一 (四国学院大学)

発表 1：

卒業論文「アニメーション作品への評価や期待に音楽が及ぼす影響」

宮津聰大 (九州大学芸術工学部音響設計学科)

宮津氏の研究は、以下のような背景と仮説から問いが設定されている。日本の放送アニメーション作品では、作品内の演出等で使用される音楽が話題になることがある。そうすると、アニメーションの作り手は、次回作の視聴を促すために、作中での音楽や効果音の使用を通して視聴者の期待感を高めていようとしているのではないか、と考えられる。そこで日本のテレビアニメーション作品『デカダンス』(2020 年放送)と『VIVY -flourite Eye's Song』(2021 年放送)の初回放送を題材とし、作品分析と質問紙調査をとおして、アニメーション作品への評価や期待に音楽が及ぼす影響を明らかにする、というものだ。

作品分析では、作中で扱われた音楽の特徴(使用された楽器、音楽の様式、リズム、雰囲気、映像との関係、音量

の 6 項目)を書き出した。また、質問紙調査においては、大学生 73 人に対して作品を視聴させ、先の 6 項目と期待の関連を調査した。明らかになったのは、アニメーション作品において、音楽やサウンドのような聴覚的な情報は、物語や映像に比べれば期待への影響は小さいが、音楽は物語や映像の評価を向上させることで期待に影響を与えていると考えられる、ということである。また、なかでもリズムと音量が印象に残りやすいことが明らかになった。

フロアからは、分析において、当該作品を選定した理由を明確にしてほしい、音楽と SE(サウンドエフェクト)の違いを明確に区分していないのではないか、というようなコメントがあり、今後の課題とするとした。

発表 2：

卒業論文「CD ジャケットの色が楽曲の色彩想起に与える影響」

井樋菜月 (九州大学芸術工学部音響設計学科)

井樋氏の研究は、以下のような背景と仮説から問いが設定されている。音楽を聴取するとき、人は風景などの具体的な事象を想起し、そこから色彩を連想することが先行する研究で示されている。では、CD ジャケットの視覚的情報は、楽曲聴取における事象の想起や色彩の連想にも結びつきやすいのではないか。この仮説を検証するために自身で行った予備調査では、CD ジャケットを見ずに楽曲を聴くと、歌詞が強く色彩を想起させ、楽曲聴取時に CD ジャケットに色彩が視覚的に提示されている場合は、CD ジャケットに使用されている色彩の想起に近づくことが明らかになった。つまり、CD ジャケットは楽曲の色彩想起を促すことを予備調査は示している。そこで、Billboard Japan の年間総合チャート過去 10 年分(2013~2022 年)の上位 5 曲を分析対象とし、使用している色数、デザインの素材、題材、タイトル表示からデザインを類型化し、CD ジャケットの色と音楽の相互関係を明らかにすることを試みた。

明らかになったのは、色彩想起の最も強い要因は曲中の使用楽器であり、つぎに歌詞である。そして、CD ジャケットのデザインは楽曲の色彩想起に部分的に影響を与える可能性が示唆できる、ということである。

フロアからは、CD ジャケットはアートワークあるいは単なるパッケージのどちらであるといえるのか。あるいはジャケットの作り手はどちらのつもりでジャケットを

作成していると考えられるか、といった質問があり、インタビューなどを通して今後の課題とするとした。

発表 3 :

修士論文「戦前日本のレコードによる西洋音楽の受容—レコード音楽への眼差しと名盤言説の形成」

熊倉光佑 (大阪市立大学大学院文化構想学専攻)

熊倉氏の研究は、以下のような背景から問いが設定されている。西洋音楽は、明治～大正期に教育や国策の一環として活用され、昭和初期から蓄音器の普及、国産レコードの生産等レコード産業の台頭によって、洋楽レコードを趣味で嗜む者が現れた。そうすると、それまで教育や学問の領域で語られてきた西洋音楽の鑑賞は、大人の教養としても語られはじめる。そこで、戦前の日本におけるレコード音楽批評空間を対象とし、西洋音楽がレコードというメディアを通してどのように聴取され、語られてきたのかを明らかにする、というものだ。

日本におけるレコード批評は 1924 年の新聞コラムから始まり、そこでは新譜紹介、批評、作曲家や演奏家の伝記、国内外レコード界の最新情報が掲載された。従来の音楽批評との相違点は、楽典的な知識ではなく「レコードの批評」に徹していることである。その後、音楽批評家によるレコード批評だけでなく、レコード愛好家たちによる同人誌の批評も現れた。このとき、愛好家兼批評家たちと従来の音楽批評家たちとの間に、批評の方法論に齟齬が生まれた。その差異とは愛好家兼批評家たちがレコードを生演奏の従属物ではなく独立した芸術としてみなそうとしたことである。その理由は、日本では洋楽の生演奏に触れられる機会に極めて乏しく、複製技術によってこそ本場の芸術に触れることができると考えたためと熊倉氏は指摘する。

また、このなかで「名盤」についての言説が戦前のレコード批評空間に現れた。現在でもレコードの批評空間で用いられるこの語は、1930 年代に現れ、演奏などの内容だけでなくレコードの希少性などによって価値を持つ珍品も、名盤として語られるようになった。このように名盤は様々な意味を付与されながら活用されていく。こうした「名盤言説」は日本独自の概念であり、多様なジャンルでも活用されていったという。

フロアからは、本研究の新奇性が明確化されておらず、そこを前面に押し出すと良いのではないかということや、

史資料の扱いや別の史資料に関することについて、コメントや情報提供がなされた。

(福永健一)

セッション B 司会：永井純一 (関西国際大学)

発表 4 :

卒業論文「宮崎で生きるラッパー：彼らが持つ夢とその過程・自己認識に焦点を当てて」

堀海斗 (宮崎公立大学人文学部)

第 1 報告は堀海斗氏による「宮崎で生きるラッパー — 彼らが持つ夢とその過程・自己認識に焦点を当てて」であった。この研究は、実際に宮崎のクラブを舞台にそこで活動するラッパーへのインタビュー調査を含むフィールドワークの成果である。

地方におけるラッパーのエスノグラフィとして興味深いのはもちろんであるが、問いが明確な分、学術研究としてもクリティカルであった。主な論点は「ラッパーになることを選択するまでの過程」、「彼らの持つ夢と現状」、「音楽活動に取り組む自らの現状」の 3 つであり、人間関係 (上下関係) や学歴、就業、趣味などの変数を掛け合わされる。その切り口は社会的であり、ラッパー達の活動が「成功とは遠い」にも関わらず、楽曲制作することで自らの音楽実践が趣味か仕事かという区分を回避し、しかし地元の人間関係や仕事というセーフティネットがあるため地元にとどまるという、彼らの姿がアンビバレンツな状況が克明に描かれていた。それはラッパーのみならず、地方の若者のライフスタイルとも通底している部分かもしれない。

フロアからはインフォーマントの属性やモデルケースに関する質問や、時代間の比較分析の可能性についてのアドバイスなど、闊達な議論が続いた。最後に「今回の報告では、ラッパーたちが地元の人間関係に絡めとられていくというような、ややネガティブな印象を受けたが…」というコメントに対し、報告者は「音楽制作におけるアドバイスや手助けなど、地元ならではの良さがある」という回答をしていた。この 1 点だけをとりても、非常に興味深く発展性のある研究テーマだと思われるので、さらなる研究成果を期待したい。

発表 5 :

卒業論文「1970 年代初期の京都における“Coffee House 拾得”の成立と受容」

村尾尚哉（京都精華大学ポピュラーカルチャー学部）

第2報告は村尾尚哉氏の「1970年代初期の京都における“Coffee House 拾得”の成立と受容」であった。京都の老舗ライブハウスとして知られる拾得を対象とし、その成り立ちや受容の過程を資料のみならず、当事者へのインタビュー調査によって、その歴史的・文化的意義を解明する、意欲的な研究である。

本研究がユニークなのは、報告者が実際に拾得に勤務していたことにあるが、インサイダーであることに甘んじることなく、研究者として中立的な立場からライブハウスやローカルな音楽実践という課題に真摯に向き合った点であろう。入念な先行研究のレビューと資料調査がなされており、そのことが明確な問題意識につながり、調査における「問い」としてクリティカルに機能したと思われる。

報告者は「飲食店とライブハウスの中間的な場所」としてライブハウスを位置付けていたが、その後のフロアとの応答においてなされたジャズ喫茶でも飲食店でもない新たなカテゴリーがなぜこの時期に登場したのかという議論は興味深いものであった。またやはりフロアとの応答において行なわれたジェンダーに関する議論、映像や京都新聞に関する議論や研究の可能性などは、いずれも研究の発展可能性を感じさせるものであった。近年、ライブハウスを対象とした研究は様々な成果が発表され、機運が高まっているので、その波に乗って研究を進展させてほしい。

発表6：

修士論文「ステレオの詩学 1960-1970：室内空間における音の聴取の物質文化とその変容のサウンドスケープ/メディア論」

牧大登（東京大学大学院学際情報学府）

第3報告は牧大登氏の「ステレオの詩学 1960-1970：室内空間における音の聴取の物質文化とその変容のサウンドスケープ/メディア論」であった。本研究は、1960年代から70年代の日本において、ステレオを用いて室内で音楽/音を聴くこととの感覚とその変容をメディア・サウンドスケープ論という視座から分析・考察したものである。

リサーチクエスションは「1960年代から70年代の大衆消費社会における音の消費美学として、人々はステレオを室内の『もの』としていかに受容し、聴取したのか」、「都市の騒音をいかに経験し、問題化したのか」の2点で

ある。本研究の全貌をここに示すことは難しいが、その新規性はここにある。社会に音楽が増加する過程と騒音の社会問題化が同時期に起こったことを指摘し、これをサウンドスケープの問題とみなす。この問題を集合住宅、装置としてのステレオ、家具としてのステレオをメディア論的に読み解く。その手捌きは洗練され、理路整然としており、非常に示唆に富むものであった。

フロアからは、ステレオ装置の置き方や部屋の間取りの詳細に関する質問があり、当時のライフスタイルや欲望に関する議論が展開された。さらに質疑は、カーステレオやウォークマンに関する議論に続いた。いずれも本報告が対象とした家庭内のステレオからズレる音響装置に関するものであり、それらが普及する80年代の研究への可能性を示す、非常に気づきの多い報告であった。

ラッパー、ライブハウス、オーディオとすべて異なるテーマかと思われたが、音楽空間における実践と言う点においては共通しており、一貫性のあるセッションであった。また、いずれも質の高い報告に触発された質問者との議論が報告を補完しており、非常に建設的で有意義なセッションであった。

（永井純一）

セッションC 司会：忠聡太（福岡女学院大学）

発表7：

卒業論文「サウンドの時代における「歌われる歌詞」の特権性の生成—宇多田ヒカル〈俺の彼女〉における形式・歌唱・歌詞の分析から—」

堂前陸（大阪市立大学文学部）

セッションCでは、特定の楽曲やアルバムに深くメスを入れる、批評的な野心に満ちた発表が揃った。

堂前陸氏の発表「サウンドの時代における「歌われる歌詞」の特権性の生成」は、宇多田ヒカルが2016年に発表したアルバム《Fantôme》の収録曲である〈俺の彼女〉を対象とし、その形式と歌唱と歌詞の総合的に分析する研究である。中河伸俊のクロスジェンダーパフォーマンス論に依拠し、男性パートと女性パートを交互に配置した歌詞、演者である宇多田ヒカルの声質や歌唱法、そこにあてがわれたメロディと伴奏の布置などが、楽曲内の主体である「俺」と「私」のジェンダーを複層的に織りなしていくプロセスに肉迫する手法からは、書かれたものを読み取るだけの次元にとどまらないポピュラー音楽の歌詞／歌唱をめぐる実践とその研究の厚みが感じられた。特

に、楽曲冒頭で提示される「俺」がまとう規範的かつ一元的なマチズモが、男性が歌う「彼女」と女性が歌う「私」による女性の二重性を前にして、終盤では男性的な強い巻き舌の発声によって女性パートのメロディと交差するように弱さを吐露するアンビバレントに帰結するという指摘は、この楽曲がもつジェンダー批評のポテンシャルを最大限に引き出していた。堂前氏の発表は卒業論文ではなく授業の課題として書かれた論考にもとづくものであったが、学術的な示唆に富むものだった。

質疑応答では、日本におけるクロスジェンダーパフォーマンスの系譜、歌手が複数の人物を演じる〈語り物〉との比較、歌詞／歌唱における演劇性・フィクション性・リアリズムをめぐる美学的な議論が展開された。発表時にはあまり触れられなかったが、宇多田ヒカル 2021 年に自身がノンバイナリーであることを公言しており、《Fantôme》発売時と 2023 年現在とでは、リスナーが想像する演者のジェンダーとセクシュアリティにもズレが生じている。〈俺の彼女〉に限らず、七回目のベルで受話器をとった「君」や、タバコの flavor がした「あなた」を、従来のジェンダー規範をとりさったところで想像しなおしていくようなクイア・リーディングの可能性についても議論が待たれる。

発表 8 :

卒業論文「K-POP の韓国語歌詞と日本語訳詞の音楽的齟齬について——日本語訳詞の「ノリの悪さ」をめぐる音韻論的研究」

小山茉衣 (大阪市立大学文学部)

小山茉衣氏の「K-POP の韓国語歌詞と日本語訳詞の音楽的齟齬について」は、K-POP 楽曲の歌詞が日本語に訳された際に生じる「ノリの悪さ」を、音韻論的に研究した卒業論文にもとづく発表である。小山氏は、歌詞を構成する要因を発音・音韻・譜割・意味内容などに腑分けし、さらに音節とモーラによる日本語と、音節のみで成立する韓国語の根本的な構造の違いに着目した。それをふまえて、日本語訳時に「ノリ」が失われてしまうケースについて、Wonder Girls (Nobody) や BIGBANG (BANG BANG BANG) などを事例としながら紹介し、リスナーとして感じた素朴な違和感を、学術的な主張に敷衍して説得的に提示していた。また、「ノリの悪さ」を克服した成功例として Secret (Shy Boy) などを挙げて、積極的な押韻、直訳

の回避、リズムやサウンドの重視といった工夫による「ノリ」のいい翻訳の可能性を指摘した。

発表中で先行研究として引かれていた論文の著者も含む多くの会員から声が上がリ、欧米の楽曲の日本語カバー問題との比較、K-POP 特有の「フックソング」と呼ばれる楽曲構成との関連性、「ノリの悪さ」を評判や再生回数から実証する可能性、韓国語が感じさせる速度に対して母音が間延びした印象をもたらす日本語との根本的な違いを深掘りする余地など、今後の研究につながる建設的なコメントが寄せられた。K-POP と括られている音楽のなかには、主にアメリカ由来のさまざまなジャンルの影響が流れ込んでおり、とりわけトラップ以降の現行ヒップホップが要請するノリや語彙に関しては、J-POP でもその適応にあたって暗中模索が続いている状態である。米・韓・日の三点を軸として立てて各ジャンルごとの翻訳の違いを分析すると、より緻密な議論が展開できるかもしれない。

発表 9 :

修士論文「Blaxploitation——コモディティ化するソウル・ミュージックにおける「黒人性」のゆくえ、1969-1974——」

佐藤智徳 (放送大学大学院文化科学研究科)

佐藤智徳氏の修士論文「Blaxploitation : コモディティ化するソウル・ミュージックにおける「黒人性」のゆくえ、1969-1974」の発表は、長丁場の例会を締めくくるのにふさわしい重厚な内容だった。ウッドストックとハーレム・カルチュラル・フェスティバルの開催、マイルス・デイヴィスの《Bitches Brew》発売といった重要な契機が重なった 1969 年 8 月を起点とし、公民権運動以降のアメリカ音楽における「黒人性」を紐解く文化史的な研究である。発表中で検討されたのは、スタックス時代のアイザック・ヘイズによるコンサート展開とその利益の再分配、ローラ・ニーロ&ラベル《Gonna Take a Miracle》とキャロル・キング《Fantasy》にみるユダヤ系アーティストによるソウルへのアプローチと女性による福祉権運動との関わり、ブラックスプロイテーション映画に積極的に参入したカーティス・メイフィールドによる黒人性の探求などの事例であり、「ソウル」全盛期の聖典を、同時代史料に基づいて相対的かつ批判的に再検討する真摯な実証の成果が提示された。あくまで私見ではあるが、名人・名盤・名演の研究がやや敬遠されがちな当学会において、特定の作

家と作品に正面から取り組んだ研究の意義が、神話の反復にとどまらないレベルで提示されたインパクトは大きい。

発表を受けて、修論の審査にも関わった佐藤良明氏とのあいだで、審査会の延長戦ともいえる踏み込んだ議論が展開された。それなりの前提知識が求められる発表であったため、例会の参加者(セッション司会担当の忠も含む)からあまりクリティカルな質問を出なかったことが悔やまれる。各章ごとに分けても個別の研究発表として成立する密度だったため、楽曲や映像の鑑賞も交えてじっくり時間をかけて議論をする機会にも期待したい。

(忠聡太)

◆information◆

事務局より

1. 登録情報に変更が生じた場合について

所属・住所・メールアドレスなどの登録情報に変更が生じた場合、できるだけ早く SMOOSY (会員マイページ) にログインし、ご自身で修正作業を行ってください。変更がない場合、学会誌や郵便物、メールニュース、例会のお知らせがお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。修正項目の入力の際には、入力内容にお間違えがないようご注意ください。

2. 退会の届け出について

本会の退会を希望される場合、速やかに学会事務局 (jimu@jaspm.jp) までお知らせください。

3. 会費請求と学会誌について

2023 年 5 月に、2023 年度の会費請求書類を、学会誌 Vol.26 (2022)と一緒に会員の皆様のお手元にお届けしました。

学会誌 Vol.26 (2022)は 2022 年度の会費納入者にお送りしておりますので、学会誌が同封されていない場合は、速やかに会費を納入いただきますようお願いいたします(会費納入後、学会誌を送付いたします)。

また、滞納分の会費納入をしたにも関わらず、学会誌が届いていない場合には、入れ違いや何らかの手違いが発生している可能性がございますので、お手数ですが事務局までご一報ください。

4. ニュースレターについて

ニュースレターは学会ウェブサイト掲載の PDF で年 3 回(春夏冬)、紙面で年 1 回(秋)の刊行となっておりますが、128 号より秋期の刊行は会員システム SMOOSY (会員マイページ) 上での公開に移行となっております。

会員の動静に関する情報は SMOOSY にて公開される号にのみ掲載され、会員マイページ上のみで閲覧が可能です。PDF で発行された号については JASPM ウェブサイトのニュースレターのページに掲載されています (URL : https://www.jaspm.jp/?page_id=213)。

JASPM NEWSLETTER 第 133 号

(vol.35 no.2)

2023 年 6 月 30 日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)

会長 増田聡

理事 安田昌弘・周東美材・小泉恭子・
永富真梨・大和田俊之・南田勝也・
永井純一・溝尻真也

学会事務局：

〒606-0016

京都府京都市左京区岩倉木野町 137

京都精華大学メディア表現学部

安田昌弘研究室内

jimu@jaspm.jp (事務一般)

jaspmkk@gmail.com (ニュースレター関係)

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：南田勝也・永井純一